

テーマ	読むことと書くことをつなぐ国語科授業の創造 ―書き手の工夫に着目した読解と複合単位における学びのファシリテーション―
発表者 (所属)	横須賀市立夏島小学校 安井 望
【発表概要】 1 実践の背景と課題 国語科の説明文の学習では、文章の内容を正確に理解することが中心となり、児童が「筆者はなぜこのような書き方をしているのか」「その工夫を自分の表現にどう生かせるか」といった視点まで深めることが十分ではない場合がある。また、読むことと書くことが別々の活動として扱われることで、教材で学んだ説明の仕方や文章構成の工夫が、児童自身の表現活動へ十分につながらないという課題がある。そこで本実践では、説明文を「内容を理解する教材」としてだけではなく、「書き手の工夫を学び、自分の表現へ生かす教材」として捉え、読むことと書くことを関連付けた複合単元の在り方について考察する。 2 実践の視点 本実践では、以下の二つの視点から授業改善を図る。 ① 書き手の工夫に着目した読解 児童が文章の内容だけでなく、どのような順序で説明しているか なぜ具体例を挙げているのか 問いと答えがどのように対応しているのか 接続語や段落構成にはどのような役割があるのかといった、筆者の表現上の工夫に目を向ける学習を行う。 ② 複合単位による読むことと書くことの往還 読む活動で得た視点を、自分の文章を書く活動へ活用する。例えば、「こまをたのしむ」では、こまの特徴を読み取るだけでなく、筆者が事例をどのように選び、どのような順序で説明しているのかを分析する。その後、自分が紹介したいものについて、学んだ説明の工夫を使って文章を書く活動へつなげる。 3 授業における教師のファシリテーション 複合単元を成立させるためには、教師が知識を伝達するだけではなく、児童の気付きや対話をつなぐ役割を果たすことが重要である。教師は、児童の発言から読みの視点を引き出す 友達の考えと比較しながら考えを深める場を設定する 文章中の根拠と結び付けて考えるよう促す 読み取った工夫を「自分ならどう使うか」という表現活動につなげられるように導く。 4 研究の成果と展望 書き手の工夫に着目した読解を行うことで、児童は文章の内容理解にとどまらず、文章を書く際の視点を獲得することができた。また、複合単位として読むことと書くことを往還させることで、児童自身が「読むことは、よりよく書くための学びになる」という価値に気付く姿が見られた。今後は、児童が継続的に言葉の働きや文章構成の工夫を活用したり、教材の特性を活かしたりするなど、国語科授業の創造を目指したい。	